

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査

平成 27(2015)年度速報

1. 今年度のサンゴの概況

1) サイト平均のサンゴ被度の比較

サイト平均のサンゴ被度を比較すると、父島周辺（小笠原）及び壱岐周辺が 50%を示し、健全度が「良」と評価されました。次いで小宝島周辺（トカラ列島）と瀬戸内周辺（奄美大島）はサンゴ被度 40%、その他のサイトはすべて 30%を示し、いずれも健全度では「やや不良」と評価されました。

2) サンゴ礁域と高緯度サンゴ群集域の平均サンゴ被度の変化

サンゴ礁域では、2006年まで 40%であった平均サンゴ被度は、2007年に八重山海域における高水温による白化現象のために 30%に減少しました。それ以来今年度まで 30%が続いており、回復には至っていませんでした。高緯度サンゴ群集域では、2004年以来平均サンゴ被度は 30%が継続し、ほとんど変化はありませんでした。

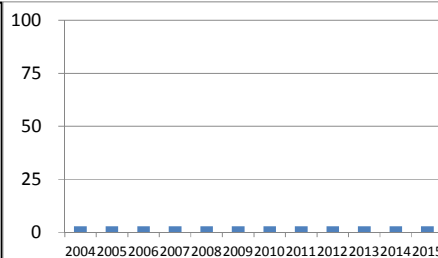
2. 各サイト及び海域の概況

高緯度サンゴ群集域

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁を形成しない温帯域のサンゴ群集分布域のことを「高緯度サンゴ群集域」と呼び、屋久島とトカラ列島の間を境界にして、館山（サイト 19）から屋久島・種子島周辺（サイト 1）までのサイトを含みます。グラフは各サイト又は海域の平均サンゴ被度（%）です。

館山(サイト 19) 調査代表者:お茶の水女子大学・清本正人

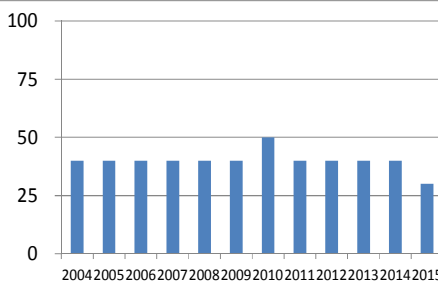
サンゴ被度は低いですが、これまでと同様の状態が維持されており、大きなかく乱はない。アワサンゴやキクメイシの他にエンタクミドリイシやトゲイボサンゴなども見られる



館山・沖ノ島で見られるエンタクミドリイシ

串本周辺(サイト 21) 調査代表者:串本海中公園センター・野村恵一

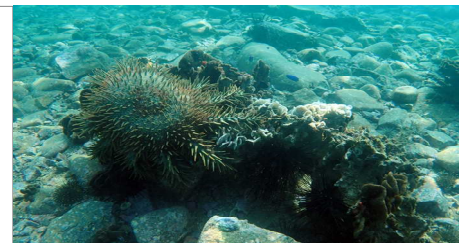
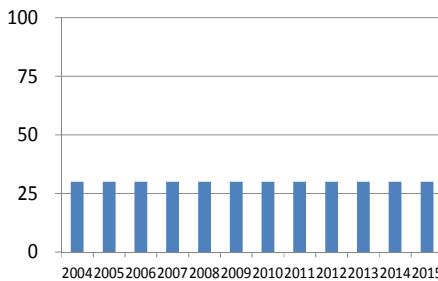
一部で感染症や台風の被害を受け、平均被度は昨年から減少した。オニヒトデ個体数は減少しているが、アオブダイが多く、食害が目立つ地点があった。スギノキミドリイシ群集の分布が拡大しつつある。



クシハダミドリイシに見られた感染症(パッチ状)

四国南西岸(サイト 22) 調査代表者:黒潮生物研究所・目崎拓真

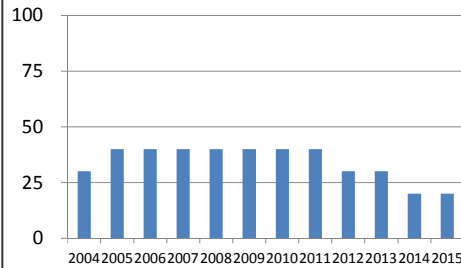
一部でオニヒトデの食害、台風被害、サンゴ食巻貝による食害などによりサンゴ被度が減少したが、全体的に卓状ミドリイシ類の成長がみられ、減少分が相殺されて昨年度と変わらないサンゴ被度となった。



オニヒトデが慢性化した地点(黒崎)

鹿児島県南部沿岸(サイト 23) 調査代表者:ダイビングサービス海案内・出羽慎一

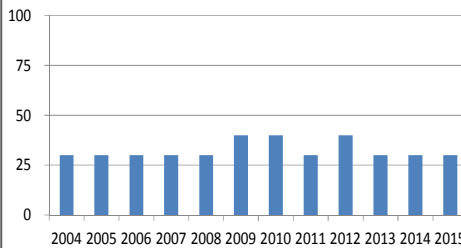
大型の台風による被害とオニヒトデの食害が見られたため、平均サンゴ被度は昨年と同じ20%の低いままであった。一部では、サンゴの病気やサンゴ食巻貝の食害も観察されている。



台風による被害(坊津馬込浜)

天草周辺(サイト 24) 調査代表者:九州大学・野島哲

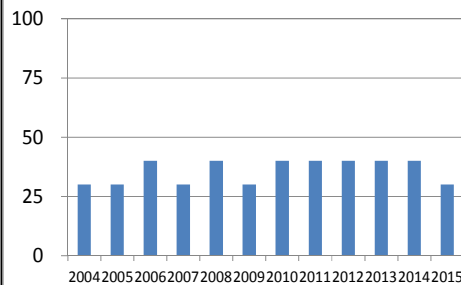
台風による被害とオニヒトデによる食害のため、成長が見られた地点の被度の増加が相殺され、全体の平均被度は昨年と変わらず30%であった。



屋間でも見られるオニヒトデ(大が瀬)

屋久島・種子島周辺(サイト 1) 調査代表者:屋久島海洋生物研究会・松本毅

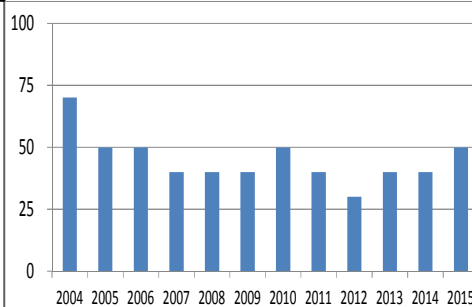
この海域では6~7月に集中豪雨が続いたため、口永良部島では沿岸の土砂が流出し、サンゴ群集に被害が見られた。5月末の口永良部島新岳の噴火では特に被害は見られなかった。



土砂に埋ったサンゴ群集(口永良部島寝待)

壱岐周辺(サイト 20) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

一部に病気やガンガゼによる食害が見られたが、大きなかく乱はなく、全体的には順調に回復して平均被度は50%に増加した。サンゴ被度による評価では高被度サンゴ群集域で唯一「良」である。



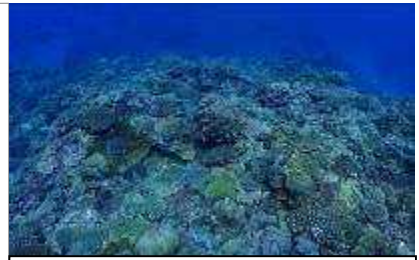
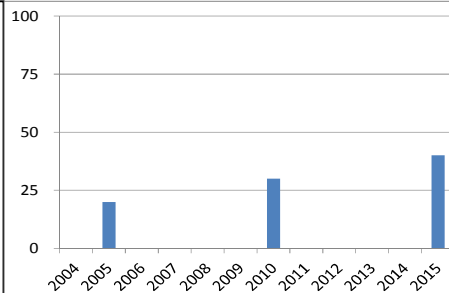
津多羅島の卓状ミドリイシ群集.

主なサンゴ礁域

主なサンゴ礁域とは、サンゴ礁を形成する亜熱帯域を指し、モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、小宝島周辺（サイト 2）以南のサイトを含みます。グラフは各サイト又は海域の平均サンゴ被度（%）です。なお、今年度は 5 年に 1 度モニタリングを行う遠隔地サイトの一つである小宝島周辺（サイト 2）の調査を実施しました。

小宝島周辺(サイト 2) 調査代表者: 自然環境研究センター・木村匡

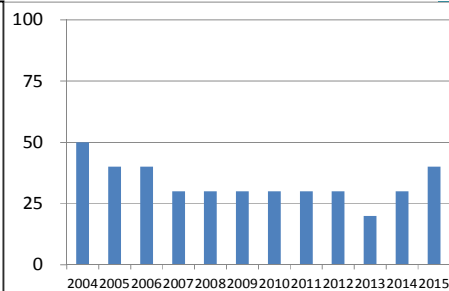
5 年前の調査時に比較すると、どの地点のサンゴ群集もよく成長しており、平均サンゴ被度は増加した。ただし、悪天候（中之島）及び火山の噴火（諏訪之瀬島）により調査できない地点があった。



多様度の高い上ノ根島のサンゴ礁景観。

瀬戸内周辺(サイト 3) 調査代表者: ティダ企画有限会社・興克樹

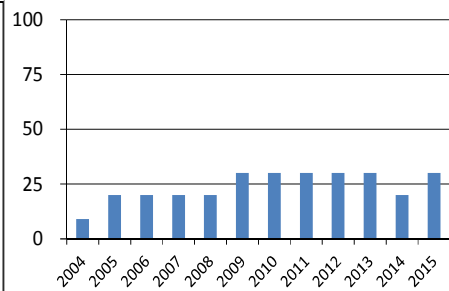
オニヒトデの大量発生や夏期の白化も無く、全体的にサンゴは緩やかな回復傾向がみられた。2016 年 1 月の記録的な寒波による部分白化が 3 地点でみられたが、いずれも軽微なものであった。



サンゴ被度 70%を示す嵯原東調査地点

沖縄島及び周辺離島海域(サイト 4~6) 調査代表者: 沖縄県環境科学センター・長田智史

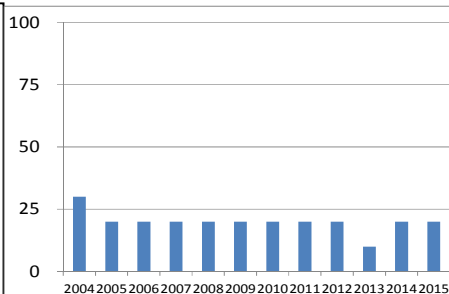
台風やオニヒトデの食害が見られたが、平均サンゴ被度は昨年より 20%から 30%に増加し、全体的には緩やかな回復傾向にあると思われる。一部でフィンキックや踏みつけによる被害が観察された。



奥武島礁斜面で見られたオニヒトデ

慶良間諸島中心海域(サイト 7) 調査代表者: 阿嘉島臨海研究所・岩尾研二

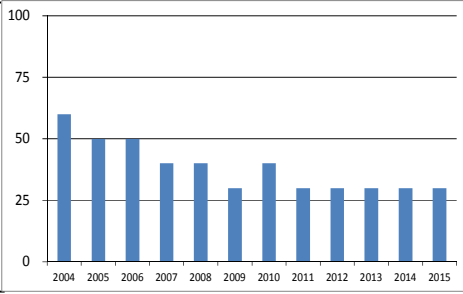
平均サンゴ被度は昨年と変わらず、まだ顕著な回復段階にはないが、小型群体が目立つ地点もあり、今後の回復が期待される。オニヒトデは 1 個体も観察されず、大発生は収束したと思われた。



小型群体による回復が期待（阿嘉島）

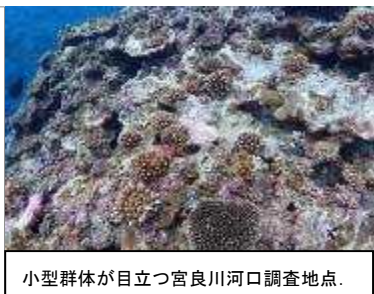
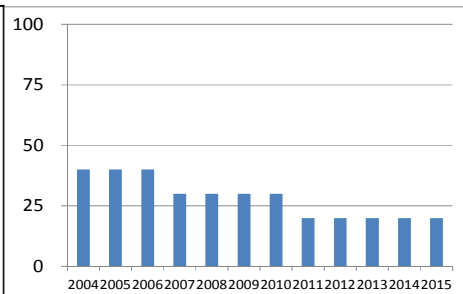
宮古島周辺及び離礁(サイト9、10)海域 調査代表者:宮古島市役所・梶原健次

平均被度は昨年と変化はなかったが、サンゴ被度が減少した地点はなく、小型群体が目立つ地点もあり、今後の回復が期待される。オニヒトデの観察は1個体のみであり、大発生は収束したと思われた。



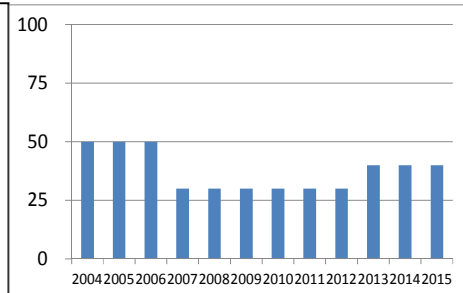
石垣島周辺(サイト11、12)海域 調査代表者:(有)海游・吉田稔

台風による被害が広く見られたが、平均被度が減少するまでには至らなかった。また、オニヒトデが観察された地点はなく、大発生は収束したと思われ、今後の回復が期待される。



石西礁湖及び西表島周辺海域(サイト13~17) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

台風の被害が多く地点で見られたが、平均サンゴ被度の減少までには至らなかった。オニヒトデは石西礁湖内で顕著ではなかったが、西表島西部の崎山湾で大発生レベルに達していた。



父島周辺(サイト18) 調査代表者:小笠原自然文化研究所・佐々木哲朗

軽微な白化と病気が見られたが、平均サンゴ被度は昨年と同じであった。被度が減少したのが3地点、増加したのは1地点、変化がなかったのが8地点であり、昨年からの回復傾向がやや停滞している。

